

十九世紀の広東語(9)上昇変音②

竹越美奈子

—

今回は、*Easy Lessons in Chinese*(Williams1842)の第五章会話篇に収録されている対話に変音があるかどうか検証した結果、“話”、“轎”のみに確認された。他の、現在変音で読まれることの多い語はその漢字本来の声調のみ記されている。当時変音が一般的でなかったのか、実際の口語と本の記載に乖離があるのかはわからない。(ただ一般に、外国人にはよそいきの言葉を教えたくなるものである。)

しかしながら、変音はまず口語的語彙から始まったという仮説は立てられる。たとえば“話”の例をみると、“英話”の場合は全3例すべてが元の声調である陽去なのに対し、“俗話”と“官話”は陽上(つまり上昇変音)と陽去が混在して(“俗話”は陽上1例と陽去1例、“官話”は陽上2例と陽去1例)、“白話”(全2例)“一句話”(全1例)、“土話”(全1例)ではすべてが陽上(=上昇変音)である。“白話”、“一句話”“土話”などが口語的な語彙であるのと比較して、“英話”は書面語的な新しい語彙で、“俗話”“官話”はその中間と考えられないだろうか。特に次例では一文に変音の例とならない例が混在している。(変音には\*をつける)

1)寫官話定寫白話\*呢?

Do you wish it written in the court dialect or in the provincial? (p.84)

以上の“話”の例はすべて知識人同士の会話を前提にした第一節「教師との会話」に出てくるので、この例に関して言えば、話す人の違いというより、語彙自体が口語的であるか否かによると言える。

二

しかし、ウィリアムスは変音という現象自体に言及していなかったし、そもそも声調に関しては調類を示すだけで各声調の調値に関する記述は全くない。(さらに言えば現代標準広東語と違って入声の種類が2種類しかなく、下の引用にあるとおり、後にボールに批判されることになる。)声調について初めに詳細に言及したのはボールであった。そこで以下では、Ball(1883)*Cantonese Made Easy*初版の当該部分を抜き出して訳出する。

多くの——全てではないにしても——表現集では声調はあまり重要ではない扱いである。もし辞書の編者が自分の気づきに忠実に声調を記述すれば、少なくとも事実をねじ曲げずにすむであろう。一般的な規則として、口語における声調を記述する試みはこれまでなかった。もしくは、試みがされたとしても、口語と書面語の声調の違いが大きいとは思わなかったため、そのような試みは一、二の点を指摘するにとどまり、実際に使用されたものとは違うものであり続けた。本を読んですべての声調を正しく発音することと、そのうちの数ページの内容を中国人に説明できることは別で、もし話者が読むときと同じ声調で話したら、言ったことがすべては理解してもらえないこと

に気づくだろう。私の考えでは、この事実を無視している限り、外国人の中国語はうまくならない。中国語の会話を学びたいと願う人にとって、本の中でこのような(訳者注:口語の)声調を無視するのはやっかいなことである。というのも、学習者は本や辞書に記載されている声調を見て言葉を発しようとするので、結局は誤った発音になってしまうからである。これに対して、もし声調が適切に記述されていれば、少なくとも適切に発音しようと試みることはできるであろう。

以上から、ボールがそれ以前に出版された辞書と実際の会話での声調の違いに気づき、本当に話されている言葉を記述することに注力したことがわかる。

本書では、書面語で用いられるものではなく口語における声調を記した。ただしアスタリスクがついている語は、別の声調もあることを示している。また、ひとつの語の声調は組み合わせによって変わることもある。

本文でアスタリスクは主に上昇変音に用いられている。なお、この習慣は現在の広東語の教材にもひきつがれている。

学習者は、中国語には過去の学者の多くが認めているものより多くの声調があると覚悟したほうがよい。中入は、本表現集が初めて紹介したものである。その存在が疑わしいと言いつ張る人は、声調の相違について何も知らないことを認めているに等しい。これは過去に一、二の初期のシノロジストによく知られていたが、最近掘り起こされるまでほとんど忘れられていた。他のいくつかの声調が存在することに疑いはないが、その存在に対する懐疑論についてはまっとうな理由がある。私は、補足的声調とでも呼ぶべきよりよい用語が必要だということ及びこれをすべての声調に体系的に適用すべきだと主張したい。これまで広東語で指摘されてこなかったのだが、スワトウ方言では、2音節語の後者、すなわち前の音節の繰り返しである2番目の音節は高低どちらの声調に属するかによってやや高く、または低く発音され、これらの声調は明確に区別して記述される。この現象は、頻度は低いながら広東語にも見られ、それは広東語とスワトウ語の声調を区別する一般規則にのっとり体系的に生じる。どういうことかと言えば、低い声調に属するスワトウ語の単語は広東語では高い声調になり、逆もまた然り。そして広東語で元の声調より低くなる補足的声調はスワトウ語では元の声調より高くなり、逆もまた然り。このような広東語における元の声調と補足的声調の間の差異は、だいたい音楽でいえば半音くらいである。\*九つの声調がそれぞれこの副次的声調をもつ。これはもちろん、現時点では中国人でさえもその存在を否定する人がいるほど論争の余地のある問題である。同じ音が二つ連続するとき、後者がより高い、もしくはより低い補足的声調へと上昇または下降するというのは、中国語の発音の法則のひとつであるように見える。そして、“咽”(koと“個”ko)のように(訳注:1888年出版の増補修訂第二版では“咽”の漢字

が“啲”に書き換えられている。注音も(ko のままで、漢字と発音が合わない。修訂ミス。)、同じ発音の単語と区別するために新しい単語の声調が上昇する例が広東語に少なくないことも、おそらく同じもしくは同類の法則によると言えるだろう。

\* 第二版への原注：ある批評家はこの部分を誤解して、その誤解のせいでこの部分に反論を続けているが、筆者はここで口語的な上昇調について言及しているのでは全くない。

この部分は複雑である。まず、先行文献が中入という調類を立てていないことへの痛烈な批判がある。(この批判が的を得ているかどうかはともかく、調類をひとつ落としたのは確かに大きなミスである。) 重要なのは、次にこれほど大きなミスではないが、と前置きして、同じ音がくりかえされる2音節語の後ろの音節の声調が変わる例について言及している。音楽でいえば半音ぐらい、ネイティブでも認識していないことがある、すべての声調に起こる、というところからみると、意味の弁別に関わらない音声的にきわめて小さな高低の差に、耳のよかったボールが過敏に反応しているように思える。例をあげていないのも、例をあげられるまでの確信に至っていなかったことの表れか、かわりに当時すでに変化が完了していた“啲”(ko と“個”ko)の例をあげている。遠称指示詞の“啲”(ko は量詞“個”ko)の声調が変わって形成されたもので、変化は“啲個”(遠称指示詞+量詞、“那個”)の組み合わせから始まってすべての場合の遠称指示詞に広がったので、同じ発音の2音節語ではあるが、変わったのは前の音節でこじつけの感がある。むしろ重要なのは第二版への原注で、これは口語的な上昇調のことではないとことわっているが、この「口語的な上昇調」こそ上昇変音のことである。

広東語の声調は八つのみではなく、実際には明確に区別できる声調が少なくとも1ダースほどあるし、他にまだ明確にはなっていないが、たぶん現在形成されつつある声調がある。しかし、初学者が悩む必要はない。初学者はそのことと併せて、すべての中国語の単語を辞書にあるような8や9や10の声調の発音に合わる必要はないと知っていればよい。広東語はそのような制限を受けるものではないし、ヨーロッパ人の中国語の発音が下手なのは、彼らがすべての中国語の単語を辞書が学習者に教える8とか9の声調のどれかに属するかのように発音しようとかだわるせいであるところが大きい。よき教師を得て、辞書がその単語の声調についてなんと言っている構わずに、正確に先生のまねをせよ。初学者は、ちょっと通じる以上のレベルを目指すなら、このような重要な声調にも注意を払うべきだが、もちろん話す前にそれがどの声調なのかを考えて極度に躊躇してしまうのも避けたい。中国語の慣用表現を流暢に話せるようになれば少しぐらい声調を間違えても——非難はされるかもしれないが、致命的なミスではないのだ。(以上は Ball 1883 *Cantonese Made Easy* 1<sup>st</sup> ed. pp.III-V.および Ball 1888 *Cantonese Made Easy* 2<sup>nd</sup> ed. pp.III-V.から引用。第二版原注を除き、両版の内容は同じ)

(つづく)